
愛の言霊を君に

万華鏡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛の言霊を君に

【Nコード】

N4149Y

【作者名】

万華鏡

【あらすじ】

舞台は光来学校。桜の舞う季節。何処にでもいるような男子高校生の葵は、同じ委員会になった雫のことが気になり始めた。いろいろ話して雫と仲良くなっていくうちに、二人はお互いの秘密や事情を知っていく。

・・・これは、そんな青年と少女のお話・・・。

登場人物（前書き）

ネタバレあります><

登場人物

なかさきあおい
○中崎葵

19歳 男 1 - A

これでも主人公。

普段は大人しめだが、男らしくて優しい一面も。
基本マイナス思考・・・かも。
病気で家族を亡くしている。

さくのかける
○咲野翔

19歳 男 1 - A

明るい皆のムードメーカー。

葵の親友。

昔、恋人を亡くしてしまったことがある。

いちじょうみづへ
○一条雫

19歳 女 1 - C

お嬢様然とした女の子。

頭の良さは多分中の上くらい。

病気もちで、その治療法は現在も見つかっていない。

第一話 プロローグは始業式

「それでは、級長を決めます。」

ここは私立光来高校。今日は始業式。桜の舞う季節。暖かで穏やかな風が吹いていた。

「誰かやりたい人はいませんか？」

そしてここ1年A組では、今級長を決めている真っ只中である。だが、案の定誰一人手をあげない。

「おい葵！お前やれよっ。」

4

突然だが、紹介しよう。こいつは俺のさくのかける小学校からの親友、咲野翔。いつもへんに明るい奴だ。そして俺は中崎葵。なかさきあおい一見普通の地味な高校生。一見というのは……まあ……俺は中学に入学したころ、病気で両親を亡くしたことに限しては少しだけ他と違うかもしれないから……話がそれた。元に戻そう。先ほど翔に、俺が級長をやれと言われたが……実は絶賛迷い中だ。やりたいようなやりたくないような……やってもやらなくても後悔してしまうような……俺のこの気持ちを分かってくれる人がいると嬉しい。

「翔はやらないのか？」

「え、俺？俺は……面倒だからやんない。」

「……………」

・・・やっぱ相変わらず翔はマイペースだ。

「・・・俺、級長やろうかな・・・。」

ぼそつと・・・本当にぼそつと呟いた言葉。だけど翔はその言葉を正確に聞き取ってしまったらしい。

「え、まじでっ！？センサー葵がやるってさー!!」

「は、ちよつ、おい！」

翔が大声でそう叫んでしまったせいで、俺たちにクラス中の視線が集まった。

「じゃあ中崎。やってくれるか？」

「・・・はい。分かりました。」

こうなってしまうばやりませんとか言えないだろう。俺は肯定の返事を返す他なかった。まあ、一度そう決まってしまったら、何か頭の中もすっきりしたし・・・結果オーライ、ということにしておこう。

「ついでに今日は委員会があるからな。放課後各教室に行くように。」

・・・。。。。。

その先生の言葉に顔をしかめた俺に、翔は机に突っ伏して笑いを堪えていた。・・・翔。後で覚えておけよ。と、いうことで、俺はHしが終わり次第翔に喝を入れた。当の本人は笑っただけで全く気に

していないみたいだが。それにしても学校に登校して1日目から委員会とか・・・普通ありえないだろう。

・・・ありえたけど。

因みに翔は委員会はやらないらしい。まあその代りに係りの仕事があるんだけど・・・それも結構簡単なものだし。全くお気楽な奴だ。

そして放課後。今日は始業式のため、授業などもなく午前中で終わった。聞いたところによると、委員会もすぐに終わるらしいので早くいって早く帰ろうと思う。因みに、翔は教室で待っていてくれるらしい。早く終わらせるよって・・・翔があんな大声出すからやる派目になったんだけどな・・・。

「ここか・・・。」

そう呟きながら、会議室というプレートがぶら下がっている教室へと入る。・・・が、来るのが早すぎたのか、まだ誰もいない。まあ、渡されたプリントにはこの場所だと書いてあるし、待っていればそのうち誰か来るだろう。そう思い、俺はしばらくの間この会議室で他の人達を待つことにした。

・・・が、

待つこと数十分。

「・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・来ねえな……。え……。何これ。これもう帰ってもいい感じか？さすがに、しーんとした教室で一人待ち続けるのはもう虚しくなってきたというかなんというか……。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

帰ろう。

そう思っただけで俺が腰を上げると、突然ドアが開いた。

「え。」

「あ、やっぱりいた。」

「は？」

入ってきたのは、上品な雰囲気を感じさせた、どこか儚い感じのする女の子。

「君、委員会で来たんだよね？」

「そうだけど……。」

「今日無くなっただけで、委員会。」

「……そうなんだ。わざわざありがと。」

「うん。それじゃあ。」

「あ、ああ……。」

そうしてその女の子は、入ってきたときと同じように去って行った。それと同時にさっきまでの静けさが戻ってきた。さっきの子……リボンが青だったから俺と同じ一年か……。

「・・・・・・・・・・。」

もう委員会はないと分かったのに、俺はなかなかその場を動けずにいた。そして少ししてからまたガラガラとドアが開き、次いで俺にとってはおもう聞きなれた声がした。

「葵ー遅えよ!!」

「・・・・あ、ワリ。」

「ったく、委員会無くなっただんらろ？いつまでボーっとしてんだよっ。」

「だから悪かったって言っただろ。」

翔が来なかったら、ずーっとボーっとしてた・・・かもな。そんなこともあって俺は翔にほんの少しだけ、感謝した。

「ま、とりあえず帰るか。」

「ああ。そうだな。」

そして俺たちは、一度教室へ戻って俺の帰りの支度をしてから、帰路を歩いて行った。言い忘れてたけど、俺と翔の家は結構近い。まあそれも手伝って、翔とは一番に仲良くなったんだ。

「お前今日は何か用事とかねえの？」

「ああ。今日は何もないけど。」

「そうか。」

因みにこの会話の意味は、『今日は買い物に行かなくていいのか』だ。何せ俺には親がいないし、一人暮らしだからな。家事全般全部一人でこなしていかなければならない。これが結構な重労働なんだ

よな。翔は俺に両親がいないことも知ってるから、たまにだけ買い物に付き合ってもらうことがあるんだ。まあ翔はこれで意外と気の遣える奴だし、なにより俺の両親のこともそこまで重く受け止めたりしないで明るく振舞ってくれるから一緒にいて気が楽なんだよな。そんなことを思っていると、突然隣から声が聞こえてきた。

「……………なあ。」

「……………え、なんだ？」

やっべえ。ちよつと思いが飛んでいた。なんか今日はこついうことが多いような……………気のせい、か……………？

「お前さっきからボーっとしすぎじゃね？何かあったのかよ？」

「別に何もねえよ。」

「そうかあ？」

俺がそう答えると、翔にめちゃくちゃ訝しげな顔で見られた。でもそんなことを聞かれても、俺にだってよくわからないんだから答えようもないよな。俺たちはしばらくそのことについて話しているうちに、いつの間にか家の前へとたどり着いていた。

「つと、もー着いたのか。んじゃ、また明日な！」

「おう。」

そしてさっきの話題はそのままに、翔はただいまーと言いながら家の中へと入って行った。俺もいつまでも突っ立っているわけにはいかないの、数メートル先にある自分の家へと歩いて入って行く。

「っはあ。疲れたな。」

誰もいない部屋の中、一人ごちる。一人で生活するようになってからつくづく思う。今はまだ家族皆で家事分担して家事をやるところも多いみたいだが、昔はその家事全般全部母親がやってたんだよね。やっぱり、世の中の母親は偉大だと思う。ま、俺には関係ないんだけどな。

「・・・・・・・・・・。」

いつもはこんな何の音も聞こえない静かな夜は、感傷に浸ってばかりだけど。今日は違った。あの子　　あの俺と同じ委員会だろう女の子のことが何故だか頭から離れない。あの子との会話がさっきから頭の中で何回もリピートされている。何故だろう、とはもう思わない。家に帰ってじっくり考えて・・・漸くその正体がわかった。俺は多分・・・

あの子に一目惚れというものをしてしまったんだ

第二話 二日目さまさかの再会

そして次の日。俺はいまだにあの女の子のことが忘れられずにいて、朝もいつもよりもボーっとして過ごした。そんなことしていても何かが変わるわけではないのに。でも、こんな気持ちは初めてだったから。そうなってしまうのかもしれないと思うんだ。

まあ、いつまでもボーっとしているわけにはいけないので、さっさと学校へ行く支度をして家を出た。そして、翔の家の前を通り過ぎようとしたところで、いきなり翔が慌てて玄関から出てきた。

「葵ー待てって！！学校まで一緒に行こうぜー。」

「あ、おー。つつか今日は起きるの早いんだな。珍しい。」

「そりゃあ、今日から本格的に高校生だからな。そんなしょっぱなからセンコーに目、つけられたくないだろ？」

「・・・お前でも、そこらへんは気にするんだな。初めて知った。」

「うわっ、相変わらず酷え奴！！」

そんな会話を繰り返しているうちに、学校に着いた。結構ギリギリだったので、教室に入って十分も経たないうちに担任の先生が来た。

「今日は新入生レクリエーションだから、着替えたら皆それぞれ体育館に行くように。」

そう、今日はレクリエーション。一日中だそうだから、授業はない。そこはラッキーだけど、俺にとってはレクも面倒なことに変わりは

なかった。

「班の紙は前に貼っておくので、ちゃんと見てから行けよ。」

それだけ言って、朝のＨＬは終わった。ここらへんこの先生早いからいい。さっそく俺たちは、初めて着る真新しいジャージに着替えた。前の黒板に貼ってある班分けの紙を見ると、どうやら俺は翔と一緒にいる。なんて偶然。でも、全く知らないやつらと一緒にいるよりかはいいか。気遣わなくていいし。そして俺と翔はしばらく話し合った後、体育館に行くことにした。

「一班はこっちです！」

「五班こっち来てー！！」

体育館では、それぞれの班の班長さんと思わしき人たちがプレートを持って立っていた。体育館にいる人数自体はそこまで多くなかったから、自分たちの班を探すのにそこまで時間はかからなかった。

俺と翔の班は七班。

さっそく俺たちはその班の場所に行った。この班はまだ誰も来ていないらしく、俺たちだけだった。

「レクリエーションって、何やるんだろうなー？」

「さあ。ま、そのうち説明とかあるだろ。」

「それもそうか。」

翔と話している間に、どんどん体育館は人で埋まって行った。

人数はひと班に約１０人。なるべく男女それぞれ５人になるようにしているんだと思う。俺と翔は同じ班に集まってきた人たちに挨拶をした。俺たち七班はあと３人来ていない。女子二人に男子一人。

遅いなと思いつながらも、あと誰が来るのか気になるから少しだけ楽しみにしながら待っている。

そしてしばらくしてから、三人が一緒に来た。

「・・・え。」

「ん、葵？どした？」

「いや、ちよつと・・・。」

驚いた。

と言つても、驚いたのも無理はないと思う。

「あ、あの時の・・・。」

「なあに、知り合い？」

「うん。おんなじ委員会の人だよ。」

三人のうちの一人は、俺がさっきまで忘れようとしても忘れられなかった人だったから。

だからと言って大して積極的でもない俺は、どうもといったただけなにもできなかったが。

それにしても同じ班とか・・・どんな偶然だよ。

「では、ルールを説明したいと思います！」

頭の中で密かに葛藤しているうちに、いつの間にか全員体育館にそろったようだった。

・・・とにかく、失敗だけはしないようにしよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4149y/>

愛の言霊を君に

2012年1月14日23時47分発行